

『標準住宅論』

平山嵩 [著]

相模書房刊 / 1950年2月 / 22cm / 397頁 / 図書番号 OF-1087

著者は1926年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業。大蔵省営繕管財局に入り、国會議事堂の室内意匠・音響設計等に従事した。その後、1940年に東京帝国大学教授に就任し、終戦後は建設省住宅基準調査委員会の委員を務めた。

「第1章 標準住宅の実例」では、各県の代表的な小住宅の間取りを図示し、それを比較する。そこにあらわれた各地方の住宅の特徴は、生活形式や住み方の違いを意味しており、その土地の気候風土にも適合しているのだから、今後の標準住宅の間取りを考えてゆく上で充分尊重されなければならない。同時に、新しい時代の生活方式に合うように改良し、合理化をはかるべきだとする。

その他に、集団住宅の実例として1941~42年に同潤会によって建てられた住宅と、戦後進駐軍家族向けに建てられた住宅を紹介する。

「第2章 従来の住宅基準」では、過去の標準住宅基準として、1941年に同潤会が作製した規準設計、1942年に政府が決定した臨時日本標準規格、1941年に建築学会が『庶民住宅の技術的研究』と題して学会誌に発表した基準を紹介する。

いずれも、戦時中の困難な状況のなかで大量生産が出来るよう考えられたものであり、今日そのままを適用することはないが、参考となる点は少なくないとみる。最後に、直近の基準として、建設省立案の1948年度住宅基準の大略を説明する。

「第3章 標準住宅の基本事項」では、住宅の寸法の取り方を考える上で、日本の度量衡がメートル制になっているにもかかわらず、住宅に関しては依然として間・尺を用いていくことや、畳の大きさが一様でない理由を述べる。

標準住宅を考える場合に基準とする家族構成については、1943年に日本生活科学会が発表した研究結果を日本学術振興会が修正し、戦後の社会情勢に適応するように改めたものの概略を示す。

また衛生や風紀の上で問題があるとされる過密居住については、イギリスなどの住居標準の規定を紹介しながら住宅の標準について考察する。

「第4章 標準住宅」では、総理府統計局の全国住宅調査など過去の統計調査に基づき、今後建設する住宅の敷地面積、床面積、室数、間取りなどを定める。将来の都市住宅の具体的な例として、著者が設計した標準住宅案も示す。また、今後都市部において必要になると考える不燃性の高層コンクリート住宅の利点について説明する。

「第5章 住宅調査」は、著者が1947年におこなった東京都の家庭の寝室調査と台所調査の結果報告である。いずれも、都内の女学校・女子専門学校を通じて各家庭に調査票を配布し調査した。寝室調査では一戸当たりの寝室数、寝室帖数、一人当たりの寝室帖数などを、台所調査では台所の面積や設備、皿など器具類の種類・現在所持数・希望最低数などを調査した。それらの結果を、戦争に際しての住宅の罹災の有無、住宅が戦前の建物か戦後の建物か、間借・アパートかなどの住宅の状態の違いと比較して検討する。

「第6章 住宅法及住宅政策」では、今後の住宅政策の参考とするため、欧米の住宅関係法令と住宅政策を紹介する。合わせて、終戦後の日本における住宅供給状況を示し、住宅不足の解消策として公営住宅事業のあり方などについて言及する。

(山野辺香葉・市政専門図書館司書主任)